かんぼれん

～カンボジアの友と連帯する会～

2020 年かんぼれんスタディーツアー日記

村上　正人

２月８日（土）

８時 40 分に成田空港に全員集合。今回のツアーメンバーはボネットさん、川地さん、３年連続の島田さん、司牧センター長の梶山さん、２年ぶりの西尾さん、それと大学生が二人、20 歳の高木さん、19 歳の土師さん、それに我々村上夫婦で総勢９人である。

ANA 便 10 時 40 分発で一路プノンペンへ。3 時半に到着。飛行機を出ると高温多湿の空気が体を包む。今年も運転手のブンさんが迎えにきてくれてバンで定宿のゴールデンゲートホテルに向かう。昨年よりも更に多くの高層ビルが建築中である。主要交差点は立体交差が増えて昨年よりも往来はスムースだ。

チェックインの後、ロビーに集まって自己紹介、それから街角のいつものレストランで夕食、グリーンカレー、アモック、アンコールビールにマンゴースムージーなどカンボジアらしいメニューを９人で囲んだ。

２月９日（日）

朝食を済ませてポル・ポト時代のジェノサイド博物館、トゥール・スレンへ。８時の開門を待って入場。コロナウイルスの影響か見学者は少ない。静かな環境で１時間の見学。一畳にも足りない粗末な独房、無理矢理自供をさせた拷問道具、ここに捉えられ処刑された老若男女の無数の顔写真。ポル・ポト政権崩壊の後に生まれた国民がどんどん増えていく中で虐殺の歴史を風化させないためだろう、新たなモニュメントを設置したり展示方法を手直ししたり博物館の管理に力を入れているようだ。３階では博物館開館 40 年の記念展示をやっていた。

続いてキリングフィールドへ。数知れぬ犠牲者の虐殺の場であり墓場である。慰霊塔には掘り起こされた無数の骸骨が祭られていて、それぞれに殺害に使われた凶器別に色シールが貼られていた。緑は鉈（なた）、黄色は鎌（かま）、紫はナイフ…、銃殺などではない、まったく野蛮な殺戮である。皆で祈りを捧げて弔った。

次に向かったのは Light of Mercy Home へ。9 歳から 25 歳までの様々な障害をもった子どもたちが共同生活をしている。到着したらさっそく恒例のパーフォーマンスを披露してくれた。今年はカンボジアの時代を追った衣服のファッションショーとかタイやフィリピンのダンスなどいろいろ工夫を凝らした出し物だった。YouTube のおかげでいろいろ新しいものにチャレンジできるようだ。三重苦のチアちゃんの見事なペンギンダンス、どうやって教えたのだろう。最後に我々がクメール語でアラッピーヤを歌ったらみんなで唱和、ダンスも踊ってくれてとても盛り上がった。この歌を紹介してくださった田中ふみさんに感謝。8 つのテーブルに分かれてランチ。見ることが出来なくても話すことが出来なくても気持ちは通じた。島田さんが用意した「簡単おもちゃ」が大いにコミュニケーションを促進した。30 人余りの入居者は毎年、結構入れ替わりがあるが、皆で助け合って楽しく暮らしていく姿に今年も癒やされた。

夕刻 6 時に JSC 責任者のギャビ神父と鳩センターのスタッフ、Jangho Hong ブラザーとボランティアの Hyeyoung Shin さんとが加わって近所のレストランで食事。

2 月 10 日（月）

朝、8 時過ぎに「元ゴミ集積地」の地区へ JLMM から派遣されている浅野さんを訪ねた。村から出てきた貧しい家族が今も「新ゴミ処理場」まで出かけて行って、金目のものを探して売ることで生計を立てている。浅野さんはこの村で貧しい子どもとお母さんたちをもう 15 年も助けている。新しい建物がオープンして、今までブリキ屋根だけの吹きさらしだった幼児の教室が室内に移動していた。クラスルームは四つ。2 歳児、3 歳児、中くらい、大きな子ども。それぞれのクラスで歌をうたって我々を歓迎してくれた。新しい建物はとても清潔で明るい。トイレも完備。ほとんどゼロからここまでの支援を立ち上げた浅野さんは本当にすごい行動力の持ち主だ。地元の人たちと信頼関係を作り、各所からの支援を受けて、保育所を作り、母親に仕事を提供し、立派な 3 階建てのセンター二つも完成させた。最後に浅野さんから今年中に日本に帰ると話があった。ここの活動は浅野さんがいなくなってもしっかり残るだろう。

次に障がい者職業訓練所「鳩センター」に向かった。「鳩センター」は昨年の 7 月に突然に政府から立ち退きを求められたとのこと。政府はここの場所に新たに建物を作り、他の障がい者対応の NPO を集結させる構想、とのこと。「鳩センター」土地はすでに半分整地されて訓練生の 12 棟の寮は既に無くなっていた。木々もすっかり伐採、農場も跡形もなし。豚は造成騒ぎで死んでしまったそうだ。事務棟、二階建てのセンターとワークショップの二棟は残っていたが 6 月までには撤退とのこと。

「鳩センター」からは車いすの部隊はこの場に残る。他の機能は車で 15 分ほど離れた所にある JSC のファームに移動する。事業としては①知的障がい者の訓練②今までの卒業生のフォロー③プロダクション④車いす事業は継続するが従来の障がい者職業訓練は一旦、ご破算にして今の時代に即したものを再構築するそうだ。

昼に今年もランチをご馳走になった。まかないのおばさんが「ボネットさんに毎年、オムレツを作ってきたが今年が最後。30 年続けた仕事も終わりになる」と涙を流していたのが印象的だった。

帰路に新しいファームに立ち寄った。ギャビ神父からの説明ではこの土地は以前に JSC が確保して農場にしていたが、今後は「新鳩センター」として活用することにした、

とのこと。来年には新しい障がい者職業訓練がはじまっているだろう。

２月 11 日（火）

朝、７時半にホテル出発して空路をシェムリアップへ。定刻に到着し JSC のスレイモンさんが迎えてくれた。

昨年と同じマリーンさんの運転でまず、地雷除去活動の NGO,HALO トラストを訪問。今年はスコットランド人の Josh が 1 時間、説明してくれた。昨年の説明役 Victoria はアフガニスタンに異動したとのこと、本部からの派遣スタッフは 18 か月～24 か月で転勤するとのこと。このような業務を世界中で続ける若いスタッフに敬意をもった。

説明は大体、例年通り。「1979 年に始まったクメールルージュとヘンサムリン部隊との内戦になってから国中に大量の地雷がばらまかれた。HALO では 90 年代は毎年 4000 個の地雷を除去、結果として地雷事故が最近は少なくなってきたが昨年は 77 件に増えた。それはタイ国境近くに幹線道路ができて新たな土地に入植する人が増えたから、とのこと。まだまだ地雷除去作業のニーズは大きい。HALO の活動はカンボジア人で進めているから現地雇用の拡大にもつながっている。昨年 12 月に 132 人採用、男女同数である」などなど。更には「今までの地雷除去活動で経済的にどれだけ効果があったか」の数字も詳しく紹介してくれた。各国から援助を求めるには「費用対効果」という観点も大事なのだ、と理解した。

12 時半くらいに HALO を出てシソポンに向かう。途中の国道沿いのレストランで昼食。空芯菜のスープがおいしかった。移動中、バンの中は若手二人とおじさんたちの掛け合いで常に賑やか。そのうちにシソポンに到着した。

まず定宿のピラミッドホテルにチェックインして JSC のオフィスに。山盛りのマンゴーに皆、感激。それからハムソックさんがスタッフと今年の活動予定を説明してくれた。最近、政府は NGO の活動にいろいろ関心を示して JSC も３年分の詳細活動レポート提出を求められているとのこと。

支援活動は昨年とほぼ同様だった。その中で近年、力を入れてきた「啓蒙のためのラジオ放送」があまり聴衆者の広がりが無いので縮小し内容も見直すそうだ。家の支援は新築２軒、修理２軒と少ない。家とか車椅子とかの「もの」による直接的支援から教育支援、人材育成、生活改善のための支援といった「村人たちの活動の間接的支援」に焦点を変えてきた、との説明。「鳩センター」だけでなく JSC シソポンも支援内容を見直してきている。

５時過ぎから今年一軒目のアウトリーチへ、近くの農家へ。2017 年に車椅子を提供した小児まひで不自由になった 38 歳の女性を訪問した。すっかりおめかしして現れた彼女はかんぼれんからの車椅子の支援に感謝してくれた。

２月 12 日（水）

早朝、まだレストランが開いていないので、ロビーで前夜に仕入れた食パンとジャム、それにヤクルトで朝食。パンは思いのほかおいしかった。7 時半にホテルを出て JSC オフィスを経由して Toul Prasat 村の小学校へ約 1 時間のドライブして 2012 年にかんぼれんが校舎を寄付した小学校に到着した。もう 10 年ほど経過したがきれいに使ってくれていてうれしい。ペンキも塗り直されているし掃除も行き届いている。校長先生が率先してメンテしてくれているようだ。

ここで自転車を提供した 8 人の生徒に会う。中学まで 8 キロ通っているとのこと。鉛筆と島田さんの「くるくるリング」、先生には二枚鏡の教材を提供した。生徒数 140 人。この村は JSC が集中していろいろのサポートしてきた地区だ。学校にはため池、トイレ、図書を提供、地域にはコミュニティーローンを最初に導入した。しかしこの地域で最近、中国企業が土地の買い占めを進めている。その結果、地価が高騰し、自分の土地を売って他の地域に引越する家族が出てきているそうだ。折角の共同体コミュニティーが虫食い状態のようになっていくので、JSC はコミュニティーローンもスモールローンも今後は中止して、他の重点支援村をさがしていく、とのこと。

HALO などが農民のために、農作業回復のために地雷除去した土地が、ここに来て中国企業に買い占められるとはおかしな話だ。移動途中で中国資本が整地した広大な土地が広がっていた。「ポイペト・サテライトオフィス」と書かれた大看板が立っている。将来にむけて何を企んでいるのであろうか？

続いて学校の近くの農家へ。ここには以前に家を提供、今度、中学生になった男の子に奨学金を支給する。基本的に貧困で父親がアルコール依存症だそうでこの日もハンモックでふせっていた。

次に Toul Pongro 村の中学校へ。ここの建物は大阪の団体が寄贈したものだった。JSC は去年 5 人に自転車を提供、他に遠方で通学ができなくて寮に暮らしている生徒にお米を提供している。支援した生徒たちから直接に感謝された。若い校長先生の話ではこの村では 7 年生が 129 人、8 年生が 89 人、9 年生が 52 人、と学年が進むにつれて段々生徒が少なくなっている。多くが中学卒業前に学校は諦めてタイに出稼ぎに出て行くそうだ。

中学校から 20 分くらい走ってマレー地区のタイとの国境へ立ち寄った。国境を渡ったところに午前中に市場が開かれて沢山、買い物客が通るそうだ。国境警備の「ものものしさ」は全く感じられない。タイに出稼ぎに行くことが如何にも簡単にできそうな環境である。

Khlargnoap 村の昨年も行ったレストランで昼食。魚の唐揚げ、クウシンサイなど。味付けは悪くない。スープに鶏の足や頭が入っていたのにはちょっとびっくりした。

ゆっくり休んで Acphivoath 村の女性の家へ。この人はアルコール依存症で内臓も悪い。入院を勧めているが本人は行く気がないそうだ。娘さんに奨学金を提供、家の修理もした。旦那さんはポイペトで働いている。まったく木も生えていない野原の一軒家。なんともさびしい。娘さんは成績が良くてザビエルスクール推薦候補者の一人とのこと。

次の家も奨学生。以前に家の修理をサポートしたファミリーだ。前回は家の前が小川で雨期に水に浸かるので家をかさ上げした。今年はここも異常気象で川は干上がっていた。

最後にカウバンクを訪問。３頭の雌牛と３頭の子牛。ずいぶんと元気良かったが牛も昨年は水不足で地域一帯で牛が病気がちだったそうだ。５歳くらいの女の子に牛が懐いていてほほえましかった。

予定を終えて４時にシソポンに戻り５時から振り返り、６時からレストランで夕食。

７時半からハムソックさん、ビチェカさんと予算会議。最終的に25,000ドルを支援すると説明。もちろん了解。最近は他の支援組織からの寄付がザビエルスクールに回って JSC シソポンへの寄付が少なくなったそうだ。だからかんぼれんからの支援は一層、ありがたがられた。今年はコミュティーローンの返済について詳しく聞いた。2014年に開始した初回の５年ローンは昨年で貸与期間が終了して回収中。回収した資金は今年、別の村のコミュニティーローンに回すとのこと。資金回収までしっかり管理していることがわかって一安心した。

２月13日（木）

７時半に出発し JSC のオフィスへ。シソポン教会のグレッグさんも来ていた。JSC シソポンに 2020年のかんぼれんからの支援金$25,000を手渡した。もちろん大いに感謝された。

今日の目的地は Bossthom 村。シソポンから 10km で舗装道路と分かれて未舗装の凸凹道を更に小一時間で到着。

最初の訪問先は67歳と68歳の夫婦に提供した家。まだ出来あがったばかりだった。娘の夫婦はタイに出稼ぎに行って孫を老夫婦で世話している。子どもの養育費は送ってくるそうだが十分では無いようだ。

次は夫がポリオで片足が不自由という夫婦に提供した新築の家。夫は農閑期の今の時期はプノンペンの建設現場で働いている。子どもが３人、８歳、４歳、２歳、いままで隣のおばさんの家に同居していたのが独立できたとのこと。

三つ目の訪問は若い夫婦で子どもは 11 カ月、他に離婚した妹の息子６歳を養子にしている。18歳の夫は闘鶏用の鶏を飼育、25歳の奥さんは小学校の臨時教員。今回、半分は自己資金、半分は JSC の支援で家ができた。

午前の最後の訪問は50代の夫婦で少額ローンの対象者。豚が６頭、子豚が６頭いたが昨年、病気であいついで死んで今は雄豚２頭だけになったとのこと。折角のローンが生かされなかったようで気の毒だ。

それから Bossthom 小学校の古い校舎で昼食。JSC の賄いさんが作ってくれたスープ、オムレツ、肉の煮込みに加えて地元の人たちも たらい一杯のお米にスープ、野菜炒めを提供してくれた。地元の人たち約20人も一緒に食事した。貴重なお米を沢山炊いて下さって有難い。昼食後に図書室に移動してサプライズセレモニーになった。村長も来られたところで校長先生からかんぼれんに感謝状を手渡された。かんぼれん活動がこれだけ感謝されている、ということは良かった。その後、教室を回って生徒にブンブン独楽を手渡し、何人かはさっそくブンブン回していた。島田さんは他に鏡など教材になるように持参した品々を校長先生に渡して感謝された。

午後の訪問は近くの農家で SRI ローンの対象者。1 ヘクタールで米 2 トンが普通だが SRI だと 4 トンが期待できるそうだ。しかし去年は干ばつで 400 キロだった。それでもローンは返済する、とのこと。厳しいときには支払いを猶予しても良いのではないか？と思った。

ホテルに戻り 5 時から振り返り、6 時からいつものレストランで夕食。戻ろうとしたときになんと大雨。かんぼれんが雨を連れてきた、とグレッグさんに喜ばれた。

2 月 14 日（金）

今朝は 6 時半に 6 階のレストランに行ってみたらオープンしていた。今年も朝日が昇るのを見ながらの朝食。コーヒーが濃くて甘い、ほとんどチョコレートのようだ。やはり食堂での朝食は落ち着く。

8 時出発でシソポン教会の運営する保育園に行ったが、今朝は先生の集まりがあるということで子どもたちはいなかった。部屋は床や壁が張り替えられるなどきれいになっていた。教会の寄宿舎の高校生も保育園を手伝っているとのこと。周囲に 15 軒の貸家があり村から出てきた貧しい家族に貸している。若い人は仕事に出かけて年寄りが残っていた。プノンペンの浅野さんの地域に比べると同じ貧困家庭の家でもこちらはゆっくりした空気で平穏な雰囲気が感じられる。

そこからザビエルスクールに移動、クエン神父とパク神父が今年も丁寧に案内してくださった。学校はグレード 10 まで進んであと二年で最初の卒業生とのこと。校舎も着実に建設されてあと主なところは中学のエリアと図書館くらい。ずいぶんと立派な学校施設で当初はスケールの大きなプランに驚いたが、数年掛けて予定通りに着々と進んでいるところはさすがだと思った。最近は評判が上がって入学希望者が多いそうだが JSC とか教会推薦の、経済的に恵まれない生徒枠も確保しているそうだ。JSC シソポンは最初は 7 人送り込んだが今は 2 名の枠しかないとのこと。学費は月に 20 ドル。生徒は黄色と緑の制服に統一されて礼儀も正しく皆、楽しそうでゆとりがありそうだった。ここの卒業生は卒業したあとカンボジアの社会の中でどのような役割を担っていくのだろうか？将来が楽しみだ。

ホテルをチェックアウトして 12 時過ぎからいつものレストランで JSC スタッフと昼食会。バレンタインデーでバラの花のプレゼント、それと昨年度の活動報告書も手渡された。来年の再会を約束して名残を惜しみながら 1 時半にシソポンを出発、JSC シェムリアップのメッタカルナへ到着。デニースさんが気持ちよく歓迎してくださった。しばらくしてスレイモンさんとモニさんも加わって彼らの活動の説明。貧しい村の支援の他に環境保全活動にも取り組んでいる。

夜はアマゾン劇場で食事のあとアプサラダンスを鑑賞。劇場はすいていて観客は半分くらい。おかげでじっくりと踊りを見られたが手足の柔軟性、体のバランスの取り方など見応えがあった。

２月１６日（土）
　最終日恒例のアンコールワット見学。ボネットさんと川地さん以外のメンバー７人で７時に出発。

　まずチケットオフィスに行ったらいつもは大混雑の広い駐車場に一台も駐車していない。まるで定休日のような光景。この様子では寺院も空いていそうだったので急遽、予定を変更してタプロームも見学することにした。

　アンコールワットもまさにガラガラ。通路で人を避けながら歩く、といった必要は無し。
　まずは３階まで登って全体の景色を眺め、それから裏門におりて第一回廊をゆっくり壁画を見ながら正面に戻った。

　バイヨンに向かったが入口の門前もいつもの渋滞は無し。それではいよいよお寺に入り見学しよう、と意気込んだら今年の１月から上の階は入場禁止になっていた。残念。１時間で回る予定が 30 分で終了。

　次にタプロームへ。ここもいつもは寺院の中に入るのに長蛇の列だったが今日は人が流れていた。中国人の観光客はまったく見かけない。韓国人も見かけない。ガイドさんの日本語の案内があちらこちらで聞こえてきた。タプロームは建物の破壊がますます進んだ感じだ。石の壁を包み込む大木の根っこは迫力がある。バイヨン寺院には上がれなかったがタプロームをじっくり見学できて良かった。

　見学を終えてマーケットへ向かい、クメールキッチンでボネットさんたちと合流。ランチを食べてマーケットで買い物してメッタカルナに戻りシャワーで汗を流した。冷水シャワーと覚悟していたのに水はタンクで熱いくらいに太陽に温められていて助かった。

　３時からツアー全体の振り返り、５時半に空港に向かった。

　シェムリアップからプノンペンへの飛行機は今日はジェット機。快適なフライトであっという間に到着。空港内のレストランで夕食。予定の ANA 便に乗り込んだ。満席。シアヌークビルでクルーズ船の乗客が下船した、との報道があり、コロナウイルスを心配して飛行機の中は皆、マスク着用だった。

２月１７日（日）
　スムースな飛行で６時過ぎに成田空港到着。坂本さんがコートなどを持って出口に迎えに来て下さった。途中で体調を壊す人が一人もいなくて本当によかった。全員で写真を撮って７時過ぎに解散した。

かんぼれん 2020年 カンボジア・スタディ・ツアー・スケジュール

2月8日 (土)	08:40 成田空港集合　／10:40 成田発(NH817直行便)→15:40 プノンペン着、 ホテルへ、夕食	機中で昼食 プノンペン泊
2月9日 (日)	06:30 朝食　／07:30 ホテル出発 08:00 ポルポト時代のジェノサイド博物館「Tuol　Sleng」見学　／09:00 TS出発 09:45 「キリング フィールド」見学　／10:45 KF出発 11:30 障がいのある子どもの家「Light of Mercy Home」交流、一緒に昼食 14:30 出発　／15:00 ホテルへ 18:00 インドン神父不在(イエズス会カンボジア責任者)・ガビー神父(JSC責任者)と他スタッフとの夕食	プノンペン泊 Golden Gate Hotel
2月10日 (月)	06:30 朝食　／07:30 ホテル出発 08:00 ごみ捨場跡地と住民へのサービス、JLMM浅野美幸さん案内／10:00 出発 11:30 旧「鳩センター」跡地訪問、スタッフと共に昼食 13:30 新しいイエズス会のファーム訪問、始めたばかりのエコロジー・プロジェクト、 (スペシャル・エデュケーション) 15:30 出発　／16:30 ホテルへ	プノンペン泊
2月11日 (火/祝)	06:30 朝食　／07:45 ホテル出発、空港へ 飛行機で(K6-105便:9:55→10:50)シエムレアプへ移動 11:30 地雷除去NGO「HALO TRUST」でカンボジアの地雷除去状況の説明 除去処理した地雷や不発弾の展示、地雷除去機材や車両など見学 12:30 シソポンへ移動(バンで1.5時間)、途中で昼食　／15:00 シソポン到着 15:00 シソポンJSC事務所へ、責任者ハムソックさんのプロジェクトについての話 17:00 支援先訪問	シソポン泊 Pyramid Hotel
2月12日 (水)	06:30 朝食　／07:15 ホテル出発 07:30 シソポンJSC事務所出発　終日、かんぼれんが前年に支援したプロジェクト を中心に、活動地域のプロジェクトを訪問　住民との話し合いや交流 夕食後、かんぼれんの支援内容について、現地スタッフとミーティング	シソポン泊
2月13日 (木)	06:30 朝食　／07:15 ホテル出発 07:30 シソポンJSC事務所出発　終日、かんぼれんが前年に支援したプロジェクト を中心に、活動地域のプロジェクトを訪問　住民との話し合いや交流	シソポン泊
2月14日 (金)	06:30 朝食　／07:15 ホテル出発　／07:30　シソポンJSC事務所で寄付贈呈、 その後、シソポン教会のグレッグ神父とPonro村のcommunity learning house訪問 09:30 Xavier Jesuit School(イエズス会ザビエル学校)、責任者クェン神父説明 12:00 シソポンJSCスタッフと一緒に昼食　シエムレアプへ移動(バンで1.5時間) 14:30 シエムレアプ JSC 事務所(Metta Karuna)到着　宿泊の部屋へ荷物置く。 プロジェクトなどの説明 責任者スレイモンさん・モニさん、Sr.デニースの話 18:30 夕食は、クメール舞踊を鑑賞しながら、JSCスタッフと一緒に	シエムレアプ泊 Metta Karuna (Jesuit Service Siem Reap)
2月15日 (土)	06:30 朝食　／07:30 ホテル出発アンコール遺跡観光(アンコール・ワット、アンコ ール・トム)　／12:00 昼食、オールド・マーケット(バザー品購入・希望者) 15:00 Metta Karunaでシャワー、夕食 17:30 空港へ出発　／18:55 シエムレアプ発(K6-118便)→19:55 プノンペン着 (乗継)22:50 プノンペン発(NH818便)→	機中泊
2月16日(日)	6:40 成田着	機中で朝食